

鳥山石燕『画図百鬼夜行』シリーズにみる身体表現

The body expressions in Toriyama Sekien's Gazu Hyakki Yagyō e-hon series

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

周 防 一 平

Ippei Suho, *Oriental Medicine Research Center, Kitasato University*

はじめに

鳥山石燕（1712～1788）は本姓佐野氏，名は豊房，狩野周信（あるいは狩野玉燕季信）に学んだ絵師で，恋川春町や喜多川歌麿の師として知られる。『画図百鬼夜行』シリーズは石燕による妖怪画集で，『画図百鬼夜行』3巻安永5年（1776）刊，『今昔画図続百鬼』3巻安永8年（1779）刊，『今昔百鬼拾遺』3巻安永10年（1781）刊，『百器徒然袋』3巻天明4年（1784）刊の4部計12冊からなり，書物や芝居，民間伝承などから集められた計203種の妖怪が記載されている。このシリーズの最も大きな特徴として挙げられるのが，妖怪の名称と図像を組み合わせたことである。すでに名称と図像の一致しているものはそのまま記載し，百鬼夜行絵巻にみられるようなカタチだけのものには名前を与え，民間伝承にみられる名称や怪異現象については姿を与えたのである。それに加えて石燕の創作も数多く記載されている。これ以降急速に妖怪のキャラクター化が進み，絵画，読物，玩具などで題材として取り上げられるようになり，現在までその人気は続いている。

身体表現から読み解く『画図百鬼夜行』の一例

石燕の描く複数の妖怪に共通する身体表現の一つとして，手首を脱力し相手に手の甲を向けるという姿位がある。一般的には「幽霊の手」の形といえは伝わりやすいだろうか。「野寺坊」「飛頭蛮」「ひやうすべ」「震々」などがこの姿位をとっている。

「幽霊の手」の説明としては「陰陽論によれば，現世は陽で幽界は陰，手のひらは陽で手の甲は陰。

幽霊は陰の世界の住人であるため陰を表す手の甲をみせている」という説が有名である。しかし経絡流注によれば，手のひらは陰経が走行する部位，手の甲は陽経が走行する部位であり，陰陽が逆になってしまうため，この説は支持し難い。ちなみに石燕の描く「幽霊」は手を挙げてこちらに手のひらをみせている。現在のような足が朦朧とし，肘を曲げ手を垂れるという幽霊の姿が定着したのは江戸後期以降である。

この姿位は現代医学的にいえば下垂手（drop hand）であり，橈骨神経麻痺の症状の一つである。主に「身体に力の入らない状態」，「他の事に集中して手に力が入っていない状態」という脱力の表現としてこの姿位が用いられているように思われる。妖怪に付随して描かれた死体もこの姿位をとっていることからそのことがうかがわれる。蛇足ながら「野寺坊」（破戒僧の妖怪）「ひやうすべ」（酔っ払いの猿のように描かれる。宮崎地方の河童系統に属すといわれる）「酒顛童子」など酒に関係性の深い妖怪もこの姿位で表現されているのは興味深い。酔いつぶれて自分の腕を枕にして寝てしまうと，圧迫により橈骨神経麻痺となるケースもあるからである。

おわりに

『画図百鬼夜行』シリーズにおける身体表現の一例として下垂手について述べたが，あくまでもこれは一例に過ぎない。他にも体毛，手足や指の本数，目の位置や数など多くの身体表現が用いられている。これらの研究を通してより多くの人に妖怪に親しんでいただければ幸いである。

最後に「妖怪」という語について述べておきた

い。「妖怪」は明治期に仏教哲学者の井上円了（1858～1919）が用いたことによって広まった学術用語である。現在一般にイメージされる俗語としての「妖怪」の普及は水木しげる（1922～）の

功績であろう。江戸期において、現在の「妖怪」を表す俗語としては「化物」や「鬼」が一般的であった。